
目録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD ~ 前世から受け継いだ私の気持ち ~

OoKaMi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD
〜前世から受け継いだ私の気持ち〜

【Nコード】

N4494BA

【作者名】

O o K a M i

【あらすじ】

初投稿であります！ HOTDが好きすぎて作っちゃいました！
二次創作ものです！
主人公は転生者ですが、ほかの方の作品に転生者が女の子の作品があまりすくなかったので作ってみました！
男女の恋愛要素がなくても・・・ガールズラブな展開があったり
なかったり読めばわかりますので、みてやってください！

第一話 南 玲菜 誕生！（前書き）

いやー、とうとう作っちゃいましたよ自分の作品・・・しかも連載小説体がどこまでもつか心配ですが全力でやらせていただきます

第一話 南 玲菜 誕生！

強い衝撃とともに目が覚める。

「うつ・・・どこどこなの？」

まったく見覚えのない場所だった・・・訂正、真っ白でなにものもない空間だった。

えっと私は飛行機で墜落してそのまま死んじゃったはずなんだけど・・・？

まったく見覚えのない空間だから正直、怖いそれで不安。何が起きているか見当がつかない。

ピカッ

目の前が急に光出した。何が起きているのかわからない。その中に人影があるのが分かった。

「誰なの？ いったい・・・」

「私は女神です。あなたを転生させるためにここに呼んだ者です」

呼んだ？ 呼ばれたの？ 私・・・。なんだか嘘くさい感じがするけど話だけでも聞いてみようかな。

「フッフ、私は嘘をつきませんよ」

「心読まれちゃったの？」

「いえ、心の声も私には聞こえるのです」

「本物なんだ」

正直本気で信用できないんですけど、それに転生って言葉に私は興味があった。

「転生はあなたを違う世界に生まれさせて、そこで起きることにチャレンジしてもらいます」

「どこなんですか？それ」

「学園黙示録の世界です。あなたの頭の中にある一番刺激的な世界を用意させていただきました」

「それって漫画の世界ですよ」

そんなこともできるんだ。たしか、死ぬ前に弟の漫画を借りて読んでいた覚えがある、アニメ版も全話みた覚えもある。バイオハザードの世界だったよね？そうだろうけど。

武器とかどうするのかな？簡単に手に入るわけでもないと思うけど。。。

「あなたには特別な力を3つ与えてあげますよ」

「……」

急に話してきたから驚いた。

「特別な力ってなんですか？」

「まあ、人より腕力が5倍とか武器をいつでもとりだせるとかです」「ずるくないですか？それ」

「ずるいですけど、ないとあなたならすぐに死んでしまいますよ？せっかく転生したのにもう無駄にするつもりでしたか？」

んー、自分で決めれないから女神さんに決めてもらおうかな？

「いいですよ」

すると急にカードが3枚あらわれてグルグルと回り始めた。どうやら出たらしく特別な力を言ってくれた。

「え〜と、動体視力UPと軍隊スキルと未来予知 です」

「軍隊スキルつてなに？」

「まあ、軍人みたいに武器に詳しくなっつて戦闘力もあがるっつて感じかな？」

「だいたいは納得した、とりあえず今与えられた力で学園黙示録の世界でできることすればいいっつてことかな？」

前世で果たすことのできなかつた私の友達を守るっつて事、ちゃんどできるのかな？でも今回は何が何でも仲間を守ろう。私はいつまでも臆病者でいるわけにはいかない！死んでしまった私の友達達の事も絶対に忘れないから。だから見てて、私もう死なないから死ぬとしても絶対なにかをやりとげて死にたい！それまでは絶対に死なない！

「いつてらっしやい・・・あなたはイレギュラーなのよ、だからその世界でも他のイレギュラーもいるかもしれないから気おつけてね」

「心得ておきます」

それが最後に聞いた女神さんの言葉だった。

目を覚ますと私は女の人に抱かれていた。とても安心する居心地の良さだった。

「お姉ちゃんに似てとてもかわいい女の子ね」

「そうだな、名前どうする？」

「そうね、リカちゃんあなたが名前決める？」

「わたしい？なにがいいのかなあ？」

どうやら私は元の女の姿のまま転生したらしいね、そして、この家族が私の新しい家族って事なんだ。最初に守るべき人たちだね。何が何でも守ってみせるから。

「愛梨なんてどう？」

お母さんが私の名前の提案をしたらしい

「玲菜なんてのはどうだ？」

今度はお父さんが候補を言ったらしい

「なにそれ？かわいい」

「だろ？リカはどう思う？」

「れいながいい！」

少し話し合ってからどうやら玲菜になったようです。私も前の名前よりじっくりくるので好きですこの名前。

ということでしたっそく自己紹介から行きましょう。

私の名前は 南 みなみれいな 玲菜です！現在0歳ですがどうぞよろしく願います！！

知っている限り、どうやらお姉ちゃんが床主国際洋上空港でスパイをしていた人みたいですな。

年齢は不明ですがとりあえず10歳年上のお姉さんっていうことです。

まあ、とくに何もすることなく5歳になりました！私はリカお姉ちゃんをリカ姉えとよんでいます。
まりかわしすか
鞠川静香さんとも出会いました。

「りかあ〜おはよ〜」

「おはよう、静香。今日も元気だね」

「うん！だって学校行けるんだもん」

玄関でリカ姉えと静香姉えが玄関で話をしていたので丁度いいからあいさつしとこうと思ったので玄関に行った。

「静香お姉ちゃんおはようございます」

「あ〜、玲菜ちゃん〜んおはよ〜」

予想はしてはいたんだけどやっぱり抱きつかれた。このときから胸がありました。

「うっ・・・ぐ・・・くるしいよお姉ちゃん！」

「静香！静香！玲菜が苦しがつてるから！」

「あ〜、ごめんね〜大丈夫だったあ？」

「う、うん大丈夫だよ」

「もお〜かわいい！リカの小さいバージョンみたいでかわいい！」

妙に私につつかかってくる静香姉え・・・ちよつと疲れてくるこの体だとね。

その後、幼稚園で小室君と高城さん宮本さんに会いました。さすがこの原作メインキャラクター達すぐに誰なのかわかっちゃいました。

主人公御一行たちと仲良くなりました。とくに宮本さんとは名前

で呼び合うくらい仲が良くなりました。

「麗ちゃん！遊ぼう！」

「うん！いいよ、遊ぼう玲菜ちゃん！」

「小室君も一緒に！」

「僕は別に……」

「いいから来るの！孝も！」

「……」

まあ、幼稚園児くらいならもつとみんな遊ぶほうが仲良くなれるよね！でも一つ、高城さんが今日は見当たらなかった……。

「高城さんどこ行ったのかな？」

「高城ならたぶん家の事だろうと思うよ」

「家ってあの物騒な話のこと？」

「そうだと思うお母さん達みんな物騒とか言ってたもんなあ」

「へえ、高城さんも大変なんだね」

このままだとイジメられるかもしれないなあ高城さん明日から高城さんにくつついておこう。いざとなったらちゃんと助けてあげないと、仲間なんだから。

「小室君は高城さんの事どう思ってるの？」

「ん？別になんとも思ってるないよ」

以外にいい人してるね小室君けっこうかわいいかも

「たぶんだけど、そろそろ高城さんいじめられるような気がするんだあ、その時は小室君の力も借りてもいいかな？」

「うん、いいよ」

「私も協力するよ！」

「ありがとう、小室君、麗ちゃん」

これで準備万端いつでもこい！って感じだね。

次の日……あつ来た来た！じゃあさつそく！

「高城さん！さつそくだけど遊ぼ！」

「私にかかわってたらアナタも苛められるわよ」

「あら、結構冷たいね高城さん」

「何よ？一体なにがしたいの？」

「今は、高城さん専用の騎士つてところかな？」

ノリで言ってみただけど私まず女の子だから騎士はまずなかったな……

まあ、結果オーライで収まるかな？

「別にいららないわそんなの」

あら、冷たいこと！まあいいもん。こつそり後をつけてるから。

ストーカーとか勘違いしないでほしい悪魔で高城さんを守るためなんだから。

とは言ったものの、急にトイレに行きたくなって目を離してしまいましたっ！キリ

早く探さないとまずいかな？

急いで幼稚園中探したけど、教室に最初からいましたっ！テヘペロ

正直こついうところは原作にも詳しく描かれてなかったから良く分からないな……。

でも、そんなの関係ない！言い訳にしかないから言わない。．．．
．．．そう決めたから．．．。

またどどん臆病な私ができてしまったかな？実行しようと思
うのはいいけどいざとなると足がうまく動かなかつたりする私がい
る。早く治さないと原作開始までに何とかしないと．．．。

とうとう思ってた日がきた。

「うえ〜い！うえ〜い！近寄ってくんやクザ！どっかいけ！しっ
し！」

しっし！は酷いなあ、一応人間なのになあ。騎士参上いたします
か！

足はいつもより重いけど大丈夫動かせる。大丈夫、相手は幼稚園児
だ怖くない、むしろけがさせそうで怖いなあ。

「てえい！」

私は走ってきてその勢いのまま、がきんちよ集団で高城さんに一番
悪口言っていたやつにとび蹴りを食らわせてあげた。 もちろん
超手加減してだよ

「グスン．．．グスン．．．」

「君たちは高城さんの．．．いや、沙耶ちゃんのお父さんたちが
この町にすっごく大切なことをしているよ！一つはボランティア活
動とかしてるじゃん！」

「南さん？．．．何してるの？」

「うん？ちよつと待っててね」

「悪い人たちが来ないか町の外で見張りだっしてしているんだよ！そ

れをヤクザヤクザつてうるさいな！こっちはちょっとでも話のネタを作ろうと思つて絵本ずつと読んでたのに邪魔ばつかしてさあ、何？そんなに私に蹴られたいの？マゾなの？ん？」

まあ、幼稚園児こんな事言つたつてなんの意味もないことくらいわかるけどさ圧力掛けてたほうが後が楽になるからね今のうちにしておいただけさ。

幼稚園児にキレた……………後悔はしてない……………たぶん……………。

まあそれから沙耶ちゃんにイジメなんて起きなくなつたからこれで一件落着いたけどまだまだ事件は起こる気がして仕方がないよ……………麗ちゃんのお父さん警察の人だつたよね？今度からお世話になるのかな？

後それと、小室君や麗ちゃんは登場せずに砂場で遊んでいたの……………。

「あの？南さん？」

「ん？なにになに？沙耶ちゃん」

「さつきはありがとう」

「大したことしてないよ！沙耶ちゃんこそ良く泣かずに堪えていられたね！えらいえらい！」

「グスン……………グスン……………」

あらら、もう我慢の限界だつたみたいだね、にしても幼稚園児なのによく我慢してたなあ見直したよ沙耶ちゃん、

私は沙耶ちゃんをゆっくり抱きしめてあげた……………沙耶ちゃんはリミッターが外れたみたいにいきなりすごい大音量で泣いた。私はただ、沙耶ちゃんの頭をなでるだけして泣き疲れて寝るのを待った。

後で私が泣かしたと勘違いされて園長先生にこっぴどく叱られた

のは秘密？

第一話 南 玲菜 誕生！（後書き）

初投稿なのでミスがあったら感想で言ってください修正してよりよい作品にしていきますのでどうぞよろしくお願いします。
最後までお読みいただきありがとうございました。

第二話 地獄の始まりまでに準備（前書き）

第二話までが結構簡単にできるんですが三話まで体もつかねえ？わ
からねえわw

次回、とうとう!？

第二話 地獄の始まりまでに準備

なんやかんやで10歳になりました！本格的にあの日に備えて武器と防具などを集めていきたいなと思っっているところでした。

静香姉えは医学大学にリカ姉えは警察学校に通っています。私は小学4年生で小室君と麗ちゃんと沙耶ちゃんとで仲良くしています。

変わった事は親が病で亡くなった事ですな……。かなりショックでした、産んでくれたのだから絶対に守ってあげたかったけど、病気には勝てず亡くなりました。

リカ姉えはその時、私がちゃんと玲菜を最後まで面倒みてあげるからね悲しむ事はないって言うてくれた時はうれしかった。家族はまだいるって自覚したから。

でもリカ姉えは警察学校をやめるって言った時は焦った、やめられたら武器確保ができなくなるからね。才能もあるんだから最後まで居てと言ったら素直に警察学校に通い続けてくれました。

それからは静香姉えの家で面倒を見てもらうことになってからいろいろ忙しくなった。静香姉えは料理はできるけどなかなか作るうとはしないのでそういうところは私がなんとかカバーすることにした。静香姉えは天然が入っているから正直相手にしづらいかな、でも静香姉えもとっても優しいし、ちゃんと怒ってくれるから結構好きになってきている。

「ん？おーい、ん？おーい！玲菜ちゃん！」

今きざいたら麗ちゃんが必死に私を呼んでいた

「はいはい？な〜にい？」

てきとうに返事をしてみたがまあスルーされた

「あのね、また二人が・・・」

「またなのね、相手にしちや麗ちゃんケガしちやうよ？」

話しているのは小室君とクラスメイトの喧嘩の話。教室でゆっくり考え事さえもさせてくれないのが小学校という檻なのかもしれないと心の中でボソツツとつぶやく

「行くよ、ケガとかされちゃどうにもならないからね」

とりあえずケガを防ぐために喧嘩の最中に横やりを入れてそのまま終止符をうつこれが今回の作戦で決定事項である。

「わかった、じゃあ早くついてきて」

「待って、今行くから」

走って喧嘩のしている場所まで案内される・・・やってるやつてる・・・

正直止めたくない小学生の喧嘩を止めると悪口の言い合いになるから逆にうるさくてたまらない。でわさっそく横やり！そんな事言ってる間にやばそうなので喧嘩に乱入。

「トワー！」

ドスッ

「痛い・・・一体だれがこんなことを？」

「やあやあ・・・喧嘩するんなら混ぜてほしいよ、ね？」

「ええっ！いやいや無理無理！かなわないから！」

「男の子が女の子に負けるとかそれ以上かつこ悪いことないよ？」

これ以上ないほどに小室君たちをなめまわす・・・効果ありかな？
そんなによくありませんでしたか。

「こいつがぶつかってきたのに謝らねえから礼儀ってやつを叩き込んでるんだ！邪魔スナナ！」

ブチッ！

「いやもういいです、はい」

「そう？じゃあ、帰り道気おつけてね」

鎮圧完了・・・喧嘩の理由がよくわからなかったので近くにあった枝を5本同時に折ってみたら相手はどこかに行ってくれたのでたすかりました。

「小室君も男の子だね」

「何がだよ？」

「いや、別に」

「……」

まあ喧嘩も終わったし今日はこれ以上疲れさせないでほしいかな。

いろんな出来事があったって15歳になりました。

リカ姉えはもうSATの隊員になってました。静香姉えは医学大
学に残りたまに高校の校医として行くくらいだった。

そのまま16歳になりもう残り1年という短すぎる日しか残って

いませんでした。ある程度みんなに話して信じてもらえてよかった。これで来年、井豪くんが死ぬことはまずないと思うわ。

できるだけの装備もかつたし非常食も手に入れた。クロスボウも手に入れることに成功した。

私中心に原作メンバーが準備を先に行っているので当日のシヨックはあるかもしれないけれど武器と食糧さえ揃っていたらこれ以上頼もしいのは仲間くらいかな。

そして、時はきた……

わざわざ学校をサボってまで正門の見張りをしていたら、来た……ほんとに来た……。

<奴ら>が来た一人しか見当たらないからあいつさえ倒せば学校は大丈夫だろうそう思いクロスボウの標準を<奴ら>の頭に合わせて……。

「……ごめんなさい……」

詫びてトリガーを引いて矢を射る。

一直線に飛んだ矢は迷うことなく<奴ら>の頭に刺さり<奴ら>は倒れた……。

「きゃあああああ」

「は？今の声、学校からじゃ!？」

あわてて学校に走って戻るとく奴らくがすでに門の中に存在していた……。

「そんな……こんなはずじゃなかったはずなのに……」

そして、校内アナウンスが流れた……。

全校生徒・職員に連絡します！全校生徒・職員に連絡します！

「まずいなこれじゃみんなが危ない……」

繰り返します！現在校内で暴力事件が発生！ブツン……キイ
イイイイン……ぎゃあああああああああ痛い痛い！死ぬ死ぬ！
うぎゃあああああああああああ

うわあああああああああきゃあああああああああ
あああああああああああ

あちこちから聞こえてくる悲鳴が地獄の始まりを意味するチャイムとなった……。

「くっ……きりがない！」

何度何度倒してもまた新しいのが追いかけて集まってくるこのままじゃ体力がもたない！なんとか中央のほうに逃げるのが優先したほうがいとみたのでとりあえず走った。何度か襲われそうな生徒

を助けてあげたけどパニックになっていて話ができる状態じゃないのがほとんどだった……。

「あっ！ちょっと！そっちく奴らゝが多いですよお！」

言ったとしても相手には全く聞こえていないらしくそのまま走って行ってしまった。

その時向こうから走ってくる小室くんと麗ちゃん井豪くんが職員室に向かって走って行くのが見えたので私も行こうとした……その時、原作では影すらなかった存在が玲菜の目の前にいる。

それはまるでゲームのバイオハザード2とかにもでてきた「リッカー」にそっくりな化け物が上から下りてきたの。

「えっ！？そんな！」

ブウウンと大きく腕を使って切り裂こうとしてきたけどなんとかかわすことに成功した。

それにしても移動速度が普通じゃないような気がする。

考え事している間にジャンプしたことに気づけず上から降ってきたときはさすがに死ぬと思ったけどこれもまたかわすことができた。

「これもあれも、女神さんのおかげねすっごく役に立つわ！」

「ウシャアアアア！」

さすがにこんなのと相手してたら時間をかなり食ってしまうじゃない！

これってはやくみんなと合流しないとさすがにきついかもしれないな。私は武器のクロスボウを地面に置いておいて手斧に持ち替えて走ってく奴らへのまえに行き舌を出したときに手斧で地面と固定クロスボウで頭をねらってうつたなんとかしとめることに成功し、力が一気に抜けた・・・。

「イレギュラーってこいつの事じゃないよね？もしかしてまだほかにもくこいつらがほかのどこかにいたとしたらそれこそ本当に危険だわ」

なんとか職員室に入ることができた。生存していたのは、玲菜、小室くん、井豪くん、麗ちゃん、沙耶ちゃん、平野君、毒島先輩、静香姉えだけだった。

原作とは全然違うことになってきているけど大丈夫なの？なによりに私たちは武装しておいたおかげでなんとかここまで生き延びることができたらしい。

いろいろ話し合ったり、TVを見て情報を集めたりして結果、小室君たちの親捜しが一番の目的となった。もちろん私も一緒に行くつもりだ。この仲間たちと一緒にいて守っていききたい。そうこの惨事が起きてから頭の中でずっと思っていた。

「移動はバスがいいでしょう」

「バスならなんとかあるよ！」

「よし、移動しよう！」

「できるだけ生き残りを拾っていこう」

「「「はい」」」

何人かは返事をしていたけど私は返事をしなかった。それよりさつきから聞こえる音のほうが重要だと思ったから。

「よしいくぞっ!」

孝がドアを開けようとしている! まずい! 今開けるのはまずい!

「小室君! 待って! 職員室前何かいるよ!」

「えっ!?!」

「ほんとだ何かこっちに来る」

「みんなドアから離れよう音を立てずに・・・」

ある程度みんなドアから離れた位置にいる影が消えてホッとした刹那、ドアが壊され全身まっかな化け物がこっちを向いて襲ってきた!

「玲菜! 逃げて!」

麗ちゃんの声が聞こえたけどそれより目の前で起きているこの非常事態でみんながパニック落ちていると私は思った。

ブウウウン!! びゅじゃだづ!

「ええ! うそでしょ! 今の危なすぎるでしょ!」

「玲菜! だめえええ!」

私はもう逃げない! みんなを守るんだ! 時間稼ぎでもしようか・・・
。。どれくらい稼げるだろう?

おそらく、5分が限界かな？何とかして10分は稼ぎたいけど無理を言うほどの時間すら勿体ない！

私はクロスボウを構えてく化け物>の前に立つ、そして小室君と毒島先輩の目を見て頭を振ってから視線をく化け物>だけに集中するようにした。

なんだかとも主人公っぽい事してるような気分になって、なんでか、わからないけど妙にテンションが高くなってきた。勝てる・・・今の私なら勝てる・・・勝って生き残らないといけない！

「すうーっはあーっ」

深呼吸を一回してから相手の足めがけてダッシュした・・・。

く麗SIDEく

危ない！何をしてるの？玲菜はあのままじゃ死んじゃうじゃない！

「助けに行かん・・・えっ？今、孝と毒島先輩になんで頭を振るの？」

私にはわからなかった玲菜がなんで動かないでく化け物>の攻撃だけを受けているのかがわからなかった。どうして？

「麗、行くぞ」

「孝？どうしてみんなで<化け物>を倒そうとしないの？私たちならなんとかできるんじゃない？」

「それはほぼ無理だ・・・ここは職員室の中で、机とかもあって身動きがとれなくなった、ならそれですべてが水の泡になってしまふ。それなら運動神経が人間離れしている南のほうがここはホームグラウンドなんだよ！南なら隠し玉も持つてるはずだしなんとかしてくれるさ、南はこの学校で一番敵に回すとやっかいな人間なんだからな」

「でも！・・・でもお・・・」

自然に涙が出てきた、バスの方向に走りながらずっと玲菜の事をかんがえていたら悪いことしか考えられなくなっていたからだ。もし玲菜が<奴ら>になったら？もしあの大きい<化け物>に殺されたら？などそういう方向の事しか考えられなくなってきていた。

「大丈夫！彼女ならきつとヘラヘラしながら帰ってくるわよお」

鞠川先生が涙を流しながらずっと笑いながらそう言っていた。

「玲菜ちゃんはSAT隊員の南　リカ　の妹なんだから！」

そういえばお姉さんがSAT隊員だって話は聞いたことがある、だから武器の事や戦闘に関して詳しくあったのかな。

「先生！！そろそろ！」

「う、うん！」

「いK」

鞠川先生が行きますと言う前に職員室の場所でもものすごい爆発があった。

「今度はなににー？」

「あ、あれは？」

「たぶん、隠し玉だったんでしょうあれが・・・」

〈玲菜SIDE〉

みんな行ったみたいだねよかった、これで本気で戦えるってことだよな？

そういつと鞆の中から筒とライターを取り出した。

「正直、これが聞かなかつたらどうしよう・・・か八かやってみようか」

リカ姉えに教えてもらったお手製のパイプ爆弾ってやつです。正直すっごく作るのに時間をかけてしまったような気もする・・・。

ライターで導火線に火をつけてタイミングを計り<化け物>に投げってみた。

ズドオオオン

「……………」

ヴァアアアア

「嘘でしょ！？効いてないの？・・・いや効いてる！腕が一本ない！」

さつきより動きが鈍い！形勢逆転かも！やったあ

ていうかパイプ爆弾一本でこんなに破壊力あるなんて・・・ちよつと種類違うんじゃないの？リカ姉え・・・てか、状況はあんまし変わらないっていうか悪化してるね。

爆音で周りにいたく奴らも呼んじゃったみたいだしクロスボウもさつきの爆風でなくしちゃったしほんとに今、危険な状態かも・・・。

持っているのは手斧二本しかないね。これを両手に持って戦うしかないか・・・。

フウウウンガアアン！

「うっ・・・痛っ！」

腕を振り落としたときに一緒に飛んできた机にもろ当たってしまった・・・。痛い・・・。

これじゃ長持ちしそうにないね。

「最後の使う？このパイプ爆弾の束にしたやつこれなら一撃で倒せる・・・。」

しかし、設置する場所が見当たらない、もう少し私が身を隠せそうなところじゃないと爆風でこっちも飛んじゃうからね。

ちよつと廊下にて保健室の中までダッシュすれば問題なさそう

「だけど、＜化け物＞がなかなか来てくれないこつなったら声を出そうそれしかない」

「こつちだよ！きてみなさいよ！」

ウガアアア

泣いたって無駄だ！

「さて、設置設置 あれ？火がつかない・・・こんなときに、早く早く！よしついた！ドアにダッシュ！＜化け物＞も私につられてこつちに来ている！でも、その調子だと絶対に倒せる」

ウアアア

「あっ！しまった！油断した・・・掴まれた！爆発する！」

ズドオオオオオオオオオ

「一瞬で目の前が暗くなった・・・。」

第二話 地獄の始まりまでに準備（後書き）

結構ミスが目立っているところがありますがまあ結構がんばってかきました。

最後までお読みいただきありがとうございました。

第三話 前世の私より少しだけ成長した（前書き）

今回は小室君たちとさっそく別行動となります。
そして、新たな、仲間とこれからどうするのか！

この小説は原作も少々いれますが、殆どがオリジナル設定なのでいろいろ期待している人はごめんなさい。
それでも、読んでくれるのならどうぞお楽しみください。

第三話 前世の私より少しだけ成長した

目を覚ます。あたりは<奴ら>もいないし人間もいない。ただ、私が気絶して廊下に倒れているだけだった。

とりあえず起き上がる。それと同時にすごい痛みを感じる。

「あ痛たたた・・・酷い目にあっちゃったなあ・・・」

全身をバットで殴られたような鋭い痛みと肘や腕や足にかすり傷がたくさんできていた。それと頭を強く打ったらしくさつきまで何をしていたか記憶があやふやになってはつきりしていなかった。

「え〜と、たしか大きい<化け物>に襲われて、みんなをバスまでたどり着くように時間稼ぎしようとして・・・爆弾を使って、倒した・・・のかな？」

やっと頭の痛みが弱まってきて、だいたいの事を思い出すことができた。

それより自分の身体の心配をしたほうがいい。血をなんとかしないと後からきつくなるだろうから、どこか安全な場所を探そう。

いつもより重い足を玄関から校舎の外まで運び、駐車場や学校の外の状態をしてみる。バスはないから小室君たちは無事に脱出できたらしい。それに、バスが門からでた時の音につられて校舎の外に居たく奴ら>の殆どが学校から居なくなっており、校庭や駐車場は<奴ら>が少ない。

「よかった。みんな脱出できたんだ。・・・守りきれたんだ」

安心と喜びがでてきてとてもよかった。しかし、自分の身体があまり言うことを聞いてくれない。そこらじゅう強打して身体の悲鳴が今でもはつきり聞こえるくらいだった。

「なんとか、安全な場所まで行かないと」

止血剤やガーゼ、消毒液、包帯は自分のポーチに用意しているから手当はできるけど、ここは安心して手当てするにはふさわしくない場所だった。

校舎の中まで行き、安全な場所を探すことにしたけど、思ったと異常に<奴ら>が校舎にいたので一回外に出て校舎の外から安全な場所がないかを探す。その途中にバットを拾い、何匹か<奴ら>を倒していき、やっと安全な場所を見つけた。

「第2理科室か、<奴ら>も居ないし、教室の前の廊下にも居ないから安全かな？」

中庭から校舎に入り、第2理科室まで足を運ぶ。第2理科室の鍵は掛っておらず中に入れた。中に入って教室の机の上にポーチを置き、手当する必要なものを出し、応急処置をする。

「痛い・・・ここは安全だからちょっと休憩しとこう。さすがにこれ以上の戦闘はあまりしたくないなあ。女神さんにいろいろ力を貰ったけど、やっぱりケガしたら辛いよね」

幸い、気絶中に噛まれてもいなかった。爆発から身を守るため、保健室まで走ったけど、途中、<奴ら>に掴まれて危なかったけど、

その前に爆発して噛まれる前に吹き飛ばされた。

「まあ、いっぱいケガしたけどね・・・生きているからまだいいけど」

私はまだ死ぬわけにはいかない。まだちつとも何もこの世界を変えてない。もつとなにか世界を変えるようなことをしたい。

もつと守るべき人たちが生きている、それを見捨ててこのまま死んだんじゃ前世の守り切れなかった私の友達に悪い。前世で「友達を守る」という事ができなかった。そのせいで、私も友達や他の乗客を死なせてしまった。

「まだ、死ぬわけにはいかない。絶対、みんなと合流して、みんなとこの苦難を乗り越えていきたい」

そう、心に深く刻み、さっそく行動にでる。

まずは、第2理科室の準備室を見て、何かないかを調べる。

とくにこれから先に必要になりそうな物がなかったのでバットを握り、第2理科室を出ることにした。さっきより身体が軽くなっておりスムーズに移動できるようになってきた。

痛みが減ってきてるみたい。これも軍隊スキルの一つなのかな？良く分からないけど、とてもありがたい。これなら生存者がいても助け出すことができそう。

「その前に、食堂に行こう。お腹すいたあ」

昼ご飯も食べてないから今はかなりお腹がすいている。

たしか、購買で売るパンを運んでくるトラックがもしかしたら来ているかもしれない。トラックからパンを取ってそれを食べよう。

< 奴ら>に会うことなく、食堂までやってこれた。一度、外に回り、窓から< 奴ら>がいないかを確認する。中には2匹だけ< 奴ら>がいた。

音を立てずに食堂に入り、ゆっくり一匹目の背後を取り、バットを頭に振り落とす。鈍い音を立てながら血をだし、男子生徒の< 奴ら>が倒れる。

「……ごめん……あと一匹！」

音を出したのでゆっくり近づいてくる。音を立てずに< 奴ら>に近づき頭にそのままバットを叩きつける。

食堂を制圧し、調理室のほうも確認する。調理室には誰もおらず、そのままトラックの止めてある裏側に行く。

運が良く、トラックが止まっていたけどその付近に< 奴ら>が四人でできた。

音を立てずに前に進み、奴らの一匹ずつ確実に倒していく。もう< 奴ら>が居ないかを確認し、そっとトラックの荷台を開けて、中から適当にパンを出し食堂まで運び、食べる。

「パン独り占めってのはいいけど、一人はやっぱり寂しいなあ」

いつもパンを食べているとき麗ちゃんや小室君に井豪くんと一緒に食べていたことを思い出し、少し悲しくなってくる。あんなにも楽しかった普段道理の生活がこの騒ぎが起きてから地獄へと変わり、多くの人が死に、く奴ら>となって人間を襲うようになってしまった。

パンを食べ終わり調理室に行きペットボトル3本に水を入れて、トラックに行きさつき倒した、く奴ら>の一匹が持っていたリュックを取り、その中に入れて、トラックからも適当にパンを取ってリュックに詰める。

次は生存者を捜すことにした。まだ見ていない所があるのでそこを見ていきたいと思う。校舎の中はある程度見たので体育館に行ってみることにする。

体育館に到着する前に三匹奴らと遭遇したけど、なるべく音を出さずに倒し、そのまま体育館に行く。

体育館に到着した。そつと少しだけ扉を開けて中を見てみるが数匹、く奴ら>がいるけど人間はいない。扉を開け中に入り、落ちていた上靴を倉庫の反対側に投げて音を出し、そこにく奴ら>を引きつけてその間に倉庫を見てみるけど、なかにはく奴ら>しかいなかったのであきらめて体育館をでる。

次は寄宿舎に向かう。学校の裏門から行くのが早いので裏門に向かう。

裏門が開きつぱなしだった、おそらく誰かが開けてどこかに逃げつていったのだろう。

裏門から出て寄宿舎に向かう。寄宿舎は男子のと女子のとある。両方の寄宿舎を見てみると男子のほうは寄宿舎に入る門が開いており、扉も開いてあるので絶望的だった。女子のほうは門は開いていないけど、扉は開いていない、庭にいるく奴らも少数だった。

ふと見ると、三階の一つの部屋に明かりがついている。おそらくあの部屋に生存者がいる可能性が高い。正面の扉は諦めて非常階段から中に入ることにした。

非常階段からだとは簡単に入れたから少し驚きながら明かりのついてた部屋まで行く。途中く奴らに会うことなく明かりがついている部屋の前まで着いた。

ゆっくり扉に耳をつけ、中の音を確認する。小さな声で話しているように思える。生存者をようやく発見する。

ゆっくり扉をノックする。

「生存者です。中に入れてください。食料と水も持っています」

中でガサガサ音を立ててゆっくり誰かが近づいてくるのがわかる。

「わかりました。今開けます」

そう言われ鍵を開けてもらい中に入れてもらった。

「ありがとう」

お礼をして中を確認する。居たのは生徒が二人に女性の教師が一人いた。扉をゆっくり閉めて、三人のいる中央に行き、そこでリュック

クを下ろす。つと同時に一人の女子生徒が「あつ！」と言い、何事かを尋ねてみた。

「そのリュック、さっき友達が食料を取りに持っていたものです」「そうだったの？でも、このリュックを持ってた人はく奴ら>になっ
つていたよ」

「えっ・・・そんな・・・」

「本当だよ、四人いたけどみんな知り合い？」

まさか、あのトラック付近にいたのはトラックのパンを取りに来たけどその前にみんな噛まれてしまいく奴ら>になってしまったのか。

「いえ、行ったのは二人です。少数で行ったほうが安全だとなつて、二人とも行きました」

「ごめんね、私・・・」

この子たちの友達を殺してしまった私が少し悪い気になってきていた。もう少し早く、移動していればこの子たちが悲しむことなんてなかったのに・・・何も変わっていないのかもしれないね私。まだ弱いかもしれない、まだ、人を守りきれるような力を持っていないのかもしれない。

一人の女の子はそのまま泣いてしまい先生が慰めている。私と話したもう一人の女の子は涙をこらえているみたいだけど、そのまま泣かないってのはいけない。泣ける時に泣いたほうが後できっと楽なる。私もこの世界の親が死んでしまつてリカ姉えに抱かれてたくさん泣いた。その後自分がもつと強くなつて両親を喜ばせてあげたいと思えたから。

私はその子に近寄りゆつくり抱きしめてあげた。

「悲しい時は、泣いたほうがいいよ。友達はずっと居るけど、ずっと君たちの事を見ている。君たちは死んでしまった友達の分もずっと生き続けるべきだよ、友達もそのことを願っているはずだよ。これからは君たちがもっと強くならないと！・・・でも今は友達の死に涙を流すことは悪いことじゃない。ちゃんと涙を流せるときに流して、流した分、君が強くなればいい。私にできる事があれば何でも言ってくれれば力になる。今、ここにいる君の友達としっかり生きなさい。私が後ろから君たちを押してあげるからね」

そい言つて安心したのか私の胸で女の子は泣いた・・・。

私もリカ姉えに抱いてもらった時すごく安心ができて、すっかり自分が見えていた。これから、どんな事が起きても、全部受け入れてちゃんと自分でどうにかすると思えた。

数分が経ち、二人とも涙を流し尽くしそのまま眠りに入った。私はもう一人の女の子を慰めていた先生に詳しく聞いた。

「あなたが慰めていた子が さいとうかなえ 斎藤 榎苗でこの子が きりしまきよつか 霧島 叶華よ」

「榎苗に叶華かぁ、二人ともこれからよろしくね」

小さな声で私は寝ている榎苗と叶華にあいさつして二人を見つめる。先生から聞くと、二人とも一年生で同じクラスらしい。

最後に先生の名前を聞く。

「私は、一年女子保健体育担当の桂かしらみゆ美夕よ。よろしくね」

「こちらこそ。で、私の名前は南みなみれいな玲菜です。玲菜って呼んでください」

「じゃあ、玲菜さんは今外がどんな状況かわかる？ それと、なんとか逃げられないかしら？」

「外はまだく奴ら>が多くいますが脱出は不可能ではないと思います。脱出するならここの非常階段から出て音を出さずに行けば脱出はできます」

「音？ 音をたてるとく奴ら>が寄ってくるの？」

「はい、く奴ら>は視覚と痛覚がなく、聴覚だけで私たちの場所を特定します」

「倒せるの？」

「一度死んでいるので、脳をどうにか潰さない限りいつまでも襲ってきます」

いくら奴らでも頭を潰せばすぐに動かなくなる。噛まれればこっちがすぐにく奴ら>の仲間入りすることになりずっと地上を歩きまわることになってしまう。

「なるほどねえ。でも、玲菜さんはどうしてここに来たの？」

「他に生存者を捜しに校内から寄宿舎まで探しに来ました」

「ありがとう。でも、そのケガ大丈夫？すごい痛そうだけど？」

「ええ、なんとか。止血も消毒もしているので問題はありません。爆発に巻き込まれたのは効きましたけどね」

「爆発つてさっきの玲菜さんがやったの？」

「はい、頭を棒とかで殴つても死ななく化け物>が出てきてそれを倒すために手製の爆弾で倒しました。他にもまだいるかもしれないので油断はできませんけどね」

「どうしてそこまでするの？あなたも女の子なのに」

うん、たしかにそうかもしれない。今まで私たちはこの世界で普通の日常を過ごしていたのに、急にこんな地獄がいつもの日常を壊し、今もその地獄は続いていて終わりそうにもない。なのに私は戦う。きつと美夕先生はケガしてまで他の人のことを考え、人のために危ない事をする私がわからないのだろう。

決まっている。それは、前世で守り切れなかった友達や他の乗客たちの分も生き抜いて、あきらめずに人の命を守りぬいてみせると誓い。死んだ両親と私はもっと強くなると約束したから……。

「この世界だからこそ、仲間を大勢つくり、みんなで協力してこの世界でなんとかしてでも生きてまた、明日同じ仲間の顔を見るために。ですよ先生」

「すごいね玲菜さんは……」

「そんなことはありません。私のせいで、他の仲間迷惑をかけているからです」

「まだいるの？」

「いえ、バスで脱出して今は御別橋付近で橋を渡ろうとしているはずですよ」

「そっか、あなたは仲間を守るために一人残ったのね」

「まあ、そういうことです。これしかなかったとはいえ、仲間迷惑をかけて反省してます」

いまごろ小室君たちは御別橋付近でリカ姉えの家かハンヴィーで移動しているのかな？なんとかして生きていてほしい。リカ姉えの武器を持っていれば生き残れるはずだ。職員室で戦ったあのく化け物>が出てきたとしても『イサカM-37』というショットガンを持っていれば倒せるだろうし。

いろいろ武器を見つけてくれるといいんだけど……。

先生は何か食べたのかな？一応持ってきたパンを渡してあげよう。

「美夕先生、お腹すいてませんか？パンと水があるんでどうぞ食べてください」

「ええ！？いいの？ありがとう」

「もとから渡すつもりで持ってきたので遠慮なく食べてください」
「うん、いただきます」

この、壊れた世界の最初の一日が終わる時に、最高の笑顔が見れてよかった。

そのあと、先生と少し世間話をしてから眠りについた。明日の予定を頭に浮かべながら……。

第三話 前世の私より少しだけ成長した（後書き）

少し、主人公弱いすぎる気がすれば強すぎる気もするなと思います。次回からは新しい仲間と行動します。どんな展開がまっているのか楽しみです。

リックカーなどタイラントなどのイレギュラーはこの小説の主人公の玲菜という、

イレギュラーがでたことによる原作の修正ということです。

最後までお読みくださってありがとうございます。

第四話 行動開始！（前書き）

今回は新しく手に入れた武器をうまく使いこなせている、叶華と榎苗に少し驚きましたね、私は。もちろん、美夕先生もうまく使いこなせるでしょうね。

今回は主人公たち御一行がかなり強くなっているので「急に、どうした？」と笑えてくるかもしれませぬね。原作キャラにはかないませんけどね。

第四話 行動開始！

朝になり目を覚ます。場所は女子の寄宿舎の三階の部屋だった。

時計を見ると、五時半だった。それから服を着替えて、廊下の外に出てみる。

< 奴ら > はいない。念のためバットを持ち、非常階段から下りて外にでる。非常階段からなら、< 奴ら > に気づかれずに門の外にでれそうだ。

ゆっくり歩き、門の外からでて、学校に戻り、パンを運ぶトラックのあつた場所まで行く。そこではトラックを利用して御別橋の近くにある私の家まで運転していくつもりだった。

近くに< 奴ら > がいなかったので、安心して作業に入れる。やることは、トラックの荷台から具が入ってないパンだけを残し、後は外に運び放置する。そして、調理室に向かい、余っているペッドボトルに水を入れ、荷台に積む。それと、包丁を数本調理室から持ってきてそれも荷台に積んだ。

今はこれだけでいい。私の家に行けば武器や食料がすぐに手に入るから問題はないと思う。

作業が終了し、一休みする。昨日の疲れはだいたいとれていて、ケガのほうもほとんど回復している。やっぱり、ちよつと治るのが早すぎるような感じもするけど。軍隊スキルの一つだろうと思ひ、特に考えることはない。

一度、みんなと相談して、これからの行動をどうするか決めていく必要がある。もし、私の家の反対側なら私の家を諦めて反対側に行くつもりでもいる。とにかく早めに移動をしないとEMPで車とかが使えなくなるので、できるだけ多く移動するには自動車が使えらるうちに自動車をとことん使っしかない。

休憩も終了して、寄宿舎の新しい仲間の元へと戻る。

帰ってきたら、六時二十五分だった。そろそろ起きてほしいので一人ずつ起こすことにした。

「美夕先生、起きてください。そろそろ起きてここを脱出しましよ
う」

まずは美夕先生を起こす。眠たそうにあくびをしながら目を覚ましてくれた。

「うん、おはよう玲菜さん」

「起きたら、叶華を起こしてください。早めに出ないとく奴らぐが上つてきますよ」

「う、うん。わかった」

そのまま叶華を起こしに隣のベットまで行き身体を揺さぶり起こそうとする美夕先生。私は反対側の榎苗を起こすことにする。

「榎苗、起きなさい。もう行くよ」

目を擦りながらふんわりと起き上がり、私の顔を見て「誰？この人」みたいな顔をしている。

「覚えてない？昨夜ここで話をしたんだけど・・・」

そういうと「あぁっ！」と驚き私の胸でおお泣きしたことを思い出したのか、顔を真っ赤にして下を向いてしまった。

「早く、着替えてからここを出る支度をしてね」

「は・・・はい、わかりました」

小さな声で返事をしてテクテクと歩き、クローゼットから着替えをだしてそのまま着替えを開始した。叶華のほうはとつくに目が覚めており、すでに着替えの最中だった。私は水とパンを外にだし、朝ごはんの準備をする。といっても購買のパンしかなくそれしかないからあまりおいしいとは言えない朝食をとることになった。

みんなが着替え終わり、中央に寄り座ってパンの袋をあけ胃に放り込む。

「じゃあ、まずは私の名前から言うね。叶華と榎苗はすっかり聞いてね。私は二年B組南 玲菜 です。玲菜でいいからね」

「はい」

「よし、じゃあまずは食べながらでいいから聞いてね。この朝食を食べ終われば、まず学校に行く。それから購買用のパンを運ぶトラックに乗り、そのまま移動することになる」

モクモクと食べる音の聞こえる中、今日の予定を話していく私。みんなは少し驚いているみたいだけど、それしかないとわかってくれてすぐに、その作戦でいこうとなった。

「あなたたちの家族の安否を確かめに行くつもりなんだけど家どこにあるの？」

とみんなの家の場所を聞いた。最初に答えたのは榎苗だった。

「私は、親が離婚して今、祖母が面倒見ていてくれたんですけど、老人ホームの人たちに世話になってるから今、どこにいるか、わからないからいいです」

「ほんとにいいの？両親には会いに行かなくてもいいの？」

「はい、両親もどこにいるんだかわからないのでいいです」

ずいぶんと複雑な家庭のようだけど、私はあえてそれ以上の事はしない。次に叶華が家の場所を言ってくれた。

「私は、御別橋の向こうです。できたら会いに行きたいです」

「御別橋の向こうなら、問題なく行けると思うよ。その前に私の家があるからそこで武器の確保もできるから戦いやすくなる」

「武器？どんなのなんですか？」

「お姉ちゃんがS A Tの隊員だからいっぱい銃を隠し持ってるんだけど・・・ちよつと持ちすぎだから、使わないのなら、今使うに事にこしたことはないからね」

「」「銃！？」」「」

「うん、銃だよ」

さすがにみんな驚くだろう。こんな身近に家に銃をたくさん隠し持ってる人間がいたなんて思えないだろうし。

「美夕先生は？」

先生の住所も聞く。

「私は、九州のほうに実家があるけど遠いからまた今度でいいって

いっつか行っても生きてる可能性なんて低くない？」

「まあ、可能性的には低いのですが、安否を確かめたほうが安心もできますし、力になれると思いますよ」

みんなの家族がいれば、みんなの気持ちも少しは楽になるだろうし、家族なら不安や恐怖を取り除いてくれる温かいものがあるからね。みんなのためにもいてくれたらありがたい。けど、＜奴ら＞になっただら逆効果だ。その場合はなんとか本人の家族が仕留めべきだが、無理そうなら私がなんとかする。

「うん、でも後でいいわ、まずあなたたちの家族を探すほうがいいと思うわ」

「わかりました。じゃあ準備も話をできたのでこれから学校に戻りましょう」

「……うん」「」

そのまま一致団結し部屋の扉をあけ廊下にする、私はバットと食料を持ち、榎苗は鉄パイプとリュックを持ち、叶華もリュックと鉄パイプを持ち、美夕先生はリュックとさすまたを持ち移動する。

非常階段はさつきと変わらず＜奴ら＞の数が少なく、落ち着いて行動ができる。

「ここからはあまり、音を出さないようにしてね。＜奴ら＞音には敏感だから」

「……わかった」「」

「それとなにが起きてても悲鳴を出さないこと、危なくなったらすぐに私が行くから我慢してね」

私が前衛を担当し、真中に榎苗と叶華、後衛には美夕先生という

ポジションで行動する。

< 奴ら > に気づかれずに寄宿舍から出て、そのまま学校まで静かに移動する。

その間にさつきはいなかった。奴ら > と遭遇する。完全に道は塞がれているけど < 奴ら > は三匹だからどうにかできそうだった。私は手で後ろに前の三匹を倒すと伝えて、ゆっくりと前に出て一匹目の頭にバットを叩きつける。それに続いて叶華がもう一匹の頭を潰す。すぐさま私は最後の一匹の頭にバットを当てて倒す。これで道は開かれ学校まで < 奴ら > に会うことなく移動できそうだ。

以外にこの三人は強い。中学三年間、叶華と榎苗は剣道をしていた実力を持っており、美夕先生は、陸上とバレーボールをしており、運動神経抜群の人物だった。

これならきつとうまく行くと思い、学校のトラックの前までたどり着く。

「叶華と榎苗には悪いけど荷台に乗って、先生は助手席で」

「玲菜さん運転できるの？」

「もちろん。姉に教えてもらったのでね」

どちらかというと軍隊スキルで運転とかも身に付いているらしくリカ姉に教えてもらうことなく簡単に乗りまわせるほどだった。

キーは最初からつけっぱなしだったのですぐにエンジンをかけて、裏門から出て御別橋のほうまでトラックを飛ばす。

「後ろの荷台のみんな聞こえる？」

「はい、聞こえます」

「じゃあ言うね。今から行く場所は私の家。そこには武器と食料がまだあるからみんなの分わたすからそれ使つてね。使い方は家に着いてから説明するから」

「わかりましたあ」

これでみんな銃を持てばなんとか行けそうだね。武器にはサブレッサーをつけるようにするし、簡単に反動の少ない武器を渡そう。

「あなた、本当に何者なんでしょうね」

となりの助手席でクスクス笑いながら私に質問してくる美夕先生。

「ごついうことに関して私は結構詳しいだけですよ・・・姉のせいでね」

と言うと納得してくれたのかクスクスと笑いながら周りの警戒をするように窓の外を見始めている。

「そのまま、外の見張りをよろしくお願いしますね」
「了解」

このみんなで何かをするのも悪くはないと思う。でも、その前に小室君たちとなんとか合流して私は生きていると証明させたいからね。残念ながら携帯は持っていないのだよ、家にあるからね、それで思いついたのだけど携帯で連絡が取れたら携帯で直接小室君に話そう。それでなんとか合流できるようにしたいけどEMPが爆発する前に連絡がとれるといいんだけど・・・。

なんとか私の家の近くまで到着しトラックから下りる。これから

は、塀を登って家の庭に入り。そのまま私の家まで行く。

「じゃあ行くよ、私が先に上に登ってみんなを持ち上げるから。早くしないと音をだしすぎているからどんどん奴らが増えてくるから行くぞ」

「……わかった」「」

私が先に塀に登りみんなを持ち上げ庭にいれる。榎苗、夕日先生、叶華の順に塀に登り、庭から私の家の近くまで行く。

三つ目の塀の中庭にはく奴らゝが三匹居た。すぐに塀に榎苗を上げて二人で掃除することにして、中庭に入り、ゆっくり近づいてから頭にバットを叩きつけて、一匹目、二匹目は榎苗が鉄パイプで頭を砕く、その時、最後の一匹が榎苗に飛びついた。

「ふんっ！」

と声を出し、く奴らゝを逆の方向に跳ね返し、とどめをさす。

「大丈夫!？」

「え、ええ。ちょっと驚いただけです」

榎苗は大丈夫みたいでよかった。その後に、さっきの家の塀に戻り叶華と美夕先生を持ち上げて中庭を通り移動していく。

やっと私の家の隣までこれた。すごく疲れたけど、これが一番安全だと思った。

門からだとタイヤの跡とたくさん死体がある。おそらく、小室君たちが今、原作道理に動いているようだ。今頃、沙耶ちゃんの

家で居るか、戦闘中つてところかな？

そう考えて、残りは家の中で考える事にしよう。とりあえず鍵を開けて中に入り、鍵をしまて家の中が誰もいないかを確認する。幸いだれもいなく、今は私たちしかいないようだ。

「これでやっと休憩できるー！」

「それよりお風呂に入りたい！」

「いいよ。じゃあ、はいろつか」

「「やったあー」」

「ほらほら先生も早くー！」

「えっ！はいはい、今行きますよ」

なんとか私の家までたどり着き、先に風呂に入ることにした。風呂からあがると私の服にみんな着替えて、昼ごはんのパンとフルーツの缶詰をみんなでたべてから、銃の保管してある所まで行く。キツチンのマットのしたの扉を開けて、梯子を下ろし、下に降りて明かりをつける。

「なにこれえ？すっごい」

この空間にはリカ姉えがためて保管してた銃の一番種類が多い隠し場所である。ガラスカバーを取り中にある拳銃を取っていく。

SIG SAUER P226 を四つ取り、サブレッサーとホルスターと一緒にみんなに配り、マガジンとマガジンポーチをみんなに渡す。みんなそれぞれ銃に一つ、マガジンポーチに弾が9ミリパラベラム弾を使った15発入りのマガジンを三つ渡してある。

次に取ったのは、H&K MP5 SFA2 を取り出し、サブ

レッサーと一緒に三人に配る。

私の武器はSPAS12の固定式銃床を取り出し、弾を最大8発入るので入れる、スパスがあればイレギュラー相手でもなんとか戦えるだろう。

次は二脚を付けた、89式小銃 を取りだす、私もMP5でいいと思っていたが中距離武器があったほうが襲われている人をすぐに助け出すことが出来ると思い89式を装備することにする。弾も多くとっておき、30発マガジンをベストのマガジンポーチに四つ入るので入れておく。サブレッサーも付けとく。

後は、肘や膝、脛にプロテクターを着けさせ、グローブをつけて準備完了。

銃や弾薬はなるべくもって行くため、一度上に持ち運び一つ一つメンテナンスをする。使用する銃は全部、問題なく、いつでも使える状態であった。

なるべく他の子たちに負担をかけないために、武器弾薬は私が持ち、食料や水、救急セットは榎苗、叶華、美夕先生に分けて持つてもらったことにした。

服も着替える。薄い緑の軍服に軍用ベストにグローブ、プロテクターを身につけちよっとしたどこかの特殊部隊みたいになった。

私のベストには特に軍用ナイフが腰にさしており、他にはスパス12で使う12番ゲージのシエルのポーチも付けている。榎苗と叶華は自分たちの武器弾薬の予備と食料と水をリュックに詰めて、背負う。見た目は私とそう変わらない服装（重装）である。美夕先生

はリュックに救急セットと自分の武器弾薬の予備が入っている。違
うのはリュックの中身のみで見た目は私と変わらない。

私のリュックには多めに持ってきた弾が入っており、ものすごく
重みを感じるが軍隊スキルが発揮しそこまで重いと感じない。重
いのは重いけど・・・。

「銃はなるべく控えよう。私が指示するまで、ここに来る前からも
ついていた武器を使おう」

「はい。結構重いですね。この荷物」

「大丈夫？私が持とうか？」

「い、いえ！大丈夫です。持てます！先輩に比べたらこの荷物は軽
いと思います」

「そう？でも、無理はしないでね」

「はい」

「それと、美夕先生と叶華も無理はしないでね」

「わかりました」

みんなに迷惑をかけて本当にすまないと思っている。でも、彼女
たちならうまく銃を使いこなすのは簡単だと思うし、サブレッサー
の付いた銃なら遠くにいるく奴らに気づかれる前に倒す事ができ
る。ただし、サブレッサーの着いていない私のMSG90じゃかえ
って危険なので彼女たちの腕に賭けよう。まあ89式を使えばいい
んだけどね。拳銃だってあるし。

これからはもっと荒れてくるだろうし、イレギュラーがまた出て
きて小室君たちに何かあつたらそれこそ最悪だ。できるだけ、早く
合流しないといけない。

携帯で小室君たちに連絡を取ってみたけど、回線が込み合っ

かなか繋がることになかったので、携帯も持ち、家の外に出る。

「さあ、行こう。みんなの事死なせないからね」

「こつちこそ、玲菜先輩を死なせませんよ。私たちも先輩を助けます」

「私たちの事は心配しなくても、大丈夫よ」

「先輩ももっと私たちに頼ってください」

みんなからそう言われるととても安心ができて、心強かった。一瞬、涙が出そうになりかけた。別に泣いてもよかったと思うけど、余計な心配はかけないで、今は橋の向こうにたどり着くことが優先すべきなのかもしれないと思った。

家を出るときは時計は昼の四時半を過ぎていた。

外にはく奴ら>が少なく、移動は簡単だった。橋の近くまで行くと、橋にはたくさんの車が放置されており、その間にはく奴ら>が多く見れる。

「予想以上にく奴ら>の数が多い・・・」

「あれで橋を渡れるんですか？」

「車があれば、強行突破すれば行けないこともないけど・・・」

「使える車が見つかるかどうかです」

「正解」

「最悪泳いで渡るっていう選択もあるけど、川の流れが強いからそれはまず却下ね」

車がないと突破は難しい。歩いて行くにしても、音を立ててしまえば前から後ろからもく奴ら>が襲ってくるという最悪の展開になってしまう。近くに放置されている車を一つ一つ見て回り、キー

が付いていたらその車を使うしかない。

数分が経ち、車が見つからない。その時、榎苗の銃が車に当たり、近くにいたく奴ら>が近寄ってきた。榎苗は怯えたように、後ろに下がり私たちと合流する。

「ごめんなさい」

「別にいいよ。それほど多いわけじゃないからね」

「よし、四人でやればすぐだよ。さつさと片付けちゃおう」

「……わかった」「」

最初に私が飛び出し、一番手前のく奴ら>の頭にホームラン級の打撃を食らわせる。それに続き榎苗は私の三步横にいたく奴ら>に飛びかかり頭を粉碎する。叶華は奥にいるく奴ら>に先制攻撃をしバランスを崩さしてから止めをさす。美夕先生はさすまたでく奴ら>を取り押さえ私が止めをさす。

そうしていると、橋の上にいたく奴ら>まで私たちのほうにきて襲いかかってきた。少し数が多いから銃を使用しよう。まだ、みんな撃つたことないけど、10メートルくらいなら簡単に当てられると思う。さつきはなるべく撃ちやすい所まできたら撃つていいと言ったのでそれさえ守ってくれば弾の減りも少ないし、確実にく奴ら>を仕留める事が可能だ。

「みんな、銃を使って。榎苗と叶華は正面のく奴ら>が10メートル以内に来たら頭を狙って。美夕先生は念のために後ろを警戒してください」

「……了解」「」

「フッフ、まるでどこかの軍隊じゃないか」

「あなたの家を出た時からそうだと思ってた」

「わたしも」

「そうだったんだ。じゃ、軍隊らしくやりましょうか。私の荷物はここに置いておくので見ていてください、運ぶ時は二人で持つように」

「玲菜先輩はなにでやるんですか？」

「サプレッサー付きの89式があるけど弾が勿体ないので、バットで百本ホームランをやるつもりよ」

そう言い、目の前まで来ていた<奴ら>にバットを振り上げ顎をくだき打ちあげる。その後ろにいた<奴ら>にも頭にバットを当てて、次々に倒していく。

さすがに数が多い。みんなのところまで下がり、「どうぞ撃つちやってください」と一言言っただけに出る。すると後ろから飛んできた銃弾が、<奴ら>の頭に当たり、血と脳を出させ倒されていく。後ろを見るとまだ10メートル内じゃないのに撃って見事に当たっている、榎苗と叶華。

初心者だとは思えない、命中率だけど、次の標的を狙うのに時間がかかりすぎている。でも、最高の出来だったので武器を持たせた私は賭けに勝ったのだと思い、<奴ら>の頭を砕いていく……。

「さあ、がんばりましょうか！」

第四話 行動開始！（後書き）

正直、ちよと強くしすぎたかな？以外にく奴ら>の数を減らしすぎているような感じにも思えてきていて、ちよつと後悔。

それでも最後まで読んでいただきありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4494ba/>

学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD ~ 前世から受け継いだ私の気持ち ~

2012年1月14日10時47分発行